

# 在宅医療における抗がん剤の曝露対策の実態調査

○五島 早苗(Ns)<sup>1)</sup> 宍戸 結理(Ns)<sup>1)</sup> 片山 智栄(Ns)<sup>1)</sup> 遠矢純一郎(Dr)<sup>1)</sup>

1) 医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック

## はじめに

近年、在宅日数の短縮化に伴い、外来や在宅で抗がん剤治療が行われる機会が増えている。国際的に認められているガイドラインでは、抗がん剤を投与された患者の排泄を扱う際には「原則として投与後48時間」の曝露予防が推奨されている。先行研究<sup>1)</sup>によると、外来で化学療法を終えて帰宅された患者の48時間時点における自宅環境の抗がん剤汚染を把握したところ、トイレの便座、床、ドアノブ、洗面所の蛇口が曝露されており、家族が継続的に曝露されていることが明らかになっている。在宅医療現場における抗がん剤治療は患者にとって恩恵がある反面、同居家族や在宅でのケア提供者に健康被害をおよぼす可能性があり、病院とは違い在宅において抗がん剤に対しての曝露対策が十分に行われているとは言い難い状況にある。そこで、今回は在宅医療における抗がん剤に対しての曝露対策の意識、認識に関する実態調査を行った。



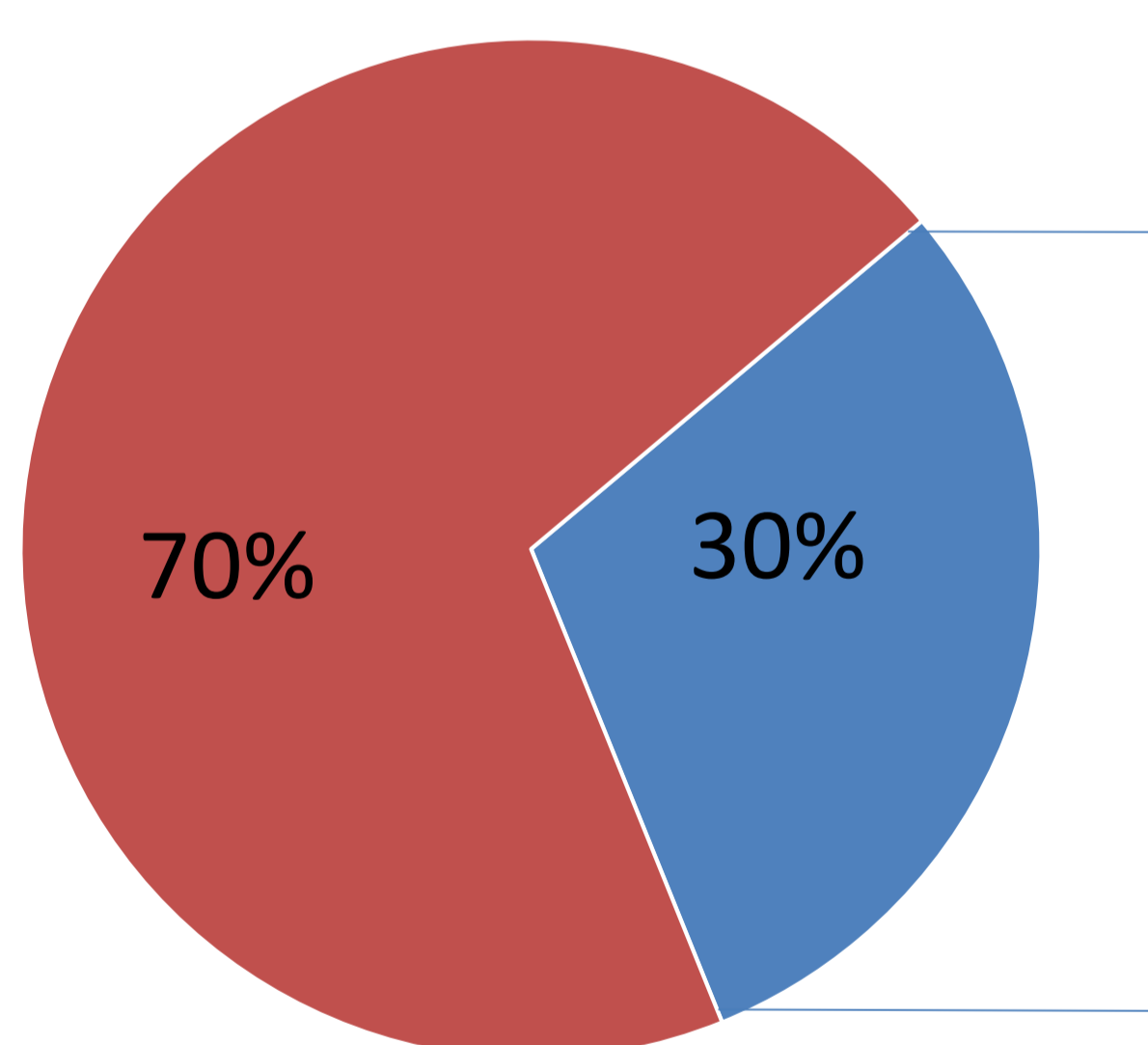
## 方法

当院の医師・看護師17人を対象に在宅での曝露対策についてのアンケートを行った。その結果、病院に勤めていた時は曝露対策を大半が行っていたが、在宅での曝露対策は殆ど行っていなかったと答えた。そこで、当院がある世田谷区の訪問看護ステーション67ヶ所に同様のアンケートをFAXで依頼した。

## 結果

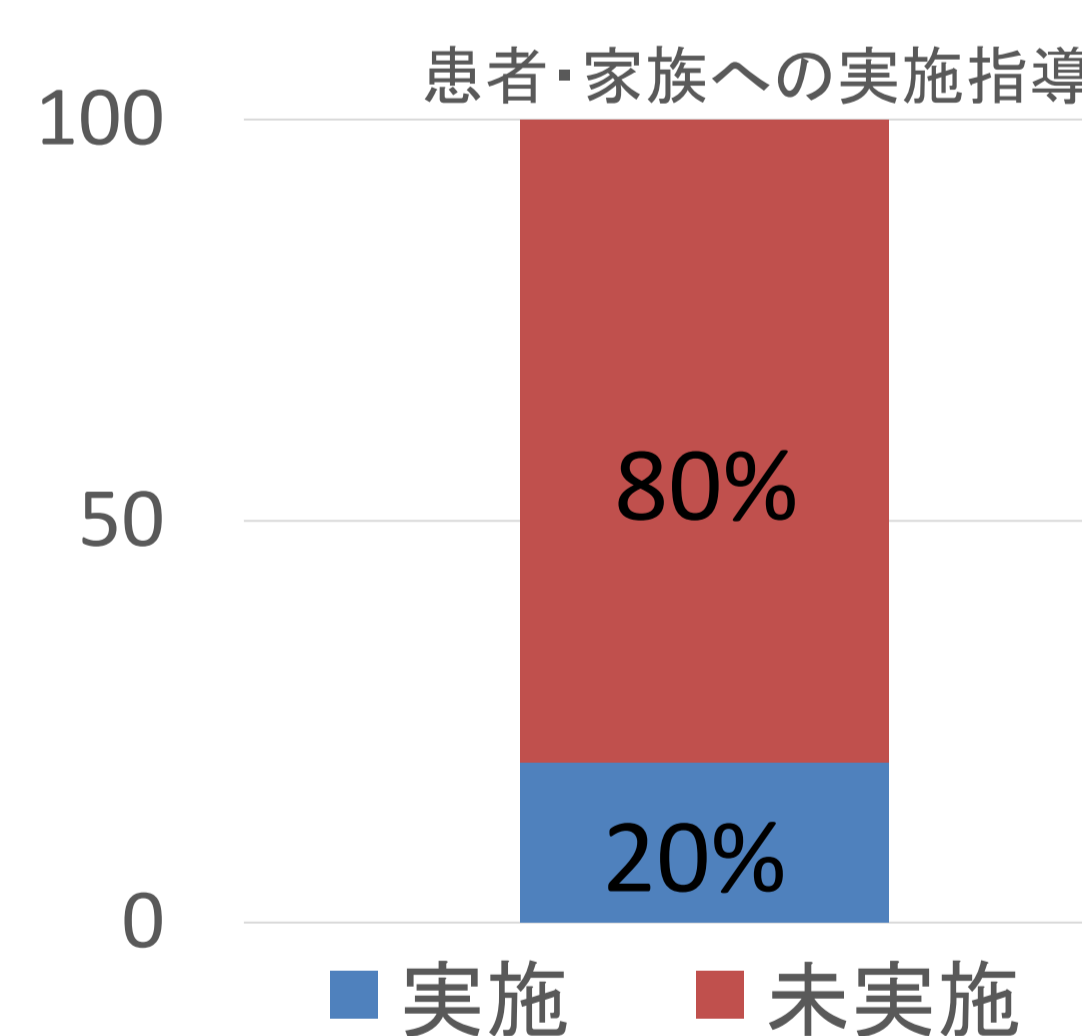
FAX回答 28ヶ所 (回答率41%)

Q抗がん剤曝露対策を行っていたか？



■ 出来ている ■ 出来ていない

Q患者・家族に対して指導を実施していたか？



●対策が出来ていなかった理由としては(4択で複数回答あり)

- ・知識がなかった 32%
- ・知識はあったが上手く説明ができなかった 3%
- ・知識はあったが説明しなかった 10%
- ・該当者がいなかった 57%

●患者・家族に指導出来ていない理由としては

- ・「避けるという意識はあったが、予防的に何を身につけなければならいかわからなかった」
- ・「病院からの指導説明は一切されておらず『今さらいわれても…』と家族から困惑された」

●出来ていた

- ・文章にして説明していた

## まとめ

抗がん剤治療を受けている在宅患者は増えてきてはいるが、現時点における曝露対策は十分とは言えない。病院では、抗がん剤治療開始と同時に副作用などについて患者に指導することはあるが、アンケートの中で『今さらいわれても…』と家族から言われたことは、病院からの曝露対策に対する指導説明は十分されていなかったのではないかと考えられる。また「知識はあったが上手く説明できなかった」、「避けるという意識はあったが、予防的に何を身につけなければならいかわからなかった」という意見があることから、在宅の生活に合わせた曝露対策の指導が行えていないのではないかと感じる。これらのことから、今後、抗がん剤治療中のがん患者、家族が安心して在宅療養生活を行っていくためには、在宅でのケア提供者と病院が連携しながら適切に曝露対策を進めていくことが重要である。

## 今後の課題

自宅で療養されている抗がん剤治療中の曝露対策について、患者・家族やケア提供者（訪問看護ステーション・ヘルパーなど）向けのパンフレットを作成し、スタッフ間の認識を高め、患者・家族にも曝露への意識を少しでも持っていただく。